



先生からは、徳島県阿波市立市場小学校当時の実践から、野菜作りを通してパティシエからスイーツづくりを子どもたちが自主的に学んでいくという大変ユニークで知的好奇心あふれる事例が報告された。野菜の育成を通して道徳教育とも関連させる取り組みである。どの実践も現場で早速学習に取り組んでみたい内容であり、大変参考になった。

次に小グループ（4～5人）に分かれ、教科書を基に1年から6年までの合科的・関連的な指導をどのように進めるか、計画を考え模造紙に書いて発表するワークショップを行った。どのグループもアイデアを絞り熱心に研修に取り組むことができ有意義な活動になった。（四国・河野）

シンポジウム「個性化教育の評価論～学力の保障と個性の伸張」

司会：加藤幸次（日本個性化教育学会会長）

シンポジスト：高浦勝義（明星大学） 猪股亮文（仙台市立茂庭台小学校）

藤巻稔（中央市立田富小学校） 浅沼茂（東京学芸大学）



大会の締めくくりとして「個性化教育における評価」を主題に、5人の先生方からの忌憚のない問題提起とフロアを交えての熱心な意見交流がなされた。

まず加藤先生から「このグループは理論と実践を結びつけながら進んでいる」という前置きの後、「関心・意欲・態度等情緒面についてきちんと評価されて

いるのか、ペーパーテストでつけているだけではないか」との問題提議があった。

それをうけ高浦先生が「授業研はするが、肝心な評価についての基準も曖昧なままである。問題解決評価の立場から、自己教育力を育てる授業と評価を進める時、とりわけルーブリックの作成が必要不可欠になる」と力説された。

自身の学校も被災した仙台的猪股先生からは「こんな時だからこそ尚更、学力の保証と個性の伸張のために、生活基盤となる親・地域・子どもの具体的な実態調査を丁寧にして、現状と課題の把握をし会議等で共有して進めている」という報告をうけた。

藤巻先生からは、評価基準を作られた経験から「ルーブリックの作成は、①分かる授業の充実、②見えない学力を想定し見取る力の向上に結びつく」という意義を話された。

最後に浅沼先生から、実際の子どもの詩を交えながら「テスト結果、結果公表、親への説明責任ががんじがらめになっている現状だからこそ、教育物語、メイクドラマ、羅生門的接近の重要性を提起したい」と投げかけられた。

各先生方の提案を受け、会場からは質問と意見交流が活発になされた。

奈須先生は「お互いを対立構造でとらえるのではなく、目標は作るが目標にとらわれないことが大切なのではないか」と発言した。猪股先生は「それぞれのメリットを生かし、子どもたちのより良い姿を求めている評価でありたい」と語った。我々教師の原点は、メイクドラマやルーブリックの作成であることを気づかされたシンポジウムであった。（千葉・加藤）

北京での「個性化教育国際大会」に参加して

加藤幸次会長

8月14、15日と、中国教育学会と中国民衆教育協会が主催する「個性化教育国際大会」に参加してきました。会場は北京大学などが集中する地区にある「国家行政学院」で、開会式では、教育部（文科省）から副大臣があいさつし、参加者は600人近く、活力に満ちていました。教育部は、2010年からの『中長期の教育改革と発展規則綱要』で、「学生に応じた教育。学生は一人ひとり特性と個性差を持っていることに注目し、潜在能力の伸長を図ることが重要である」、と規定しています。個性化教育は中国の基本政策です。

日本の1984年の臨時教育会議の「個性尊重」を思い出します。中国社会もまた、一人ひとりの学習者に注目する段階に達したのでしょうか。会議では、日本での近年の「個性化教育」への攻撃と衰退を気にし、うしろめたさを感じながら、本学会の活動について話しました。今後は、中国からの強力な「外圧」に期待したい、と思います。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

庶務部長 佐久間 茂和

〒338-0013

埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510

TEL 048(678)1681

e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ

http://koseika.com/

日本個性化教育学会 第13号

平成23年 10月29日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕

編集 広報部 中田 泰志

日本個性化教育学会

発行

平成23年10月29日

発行責任者

加藤 幸次

日本個性化教育学会報

第13号

新学習指導要領が実施され、いわゆる分厚くなった教科書を使ってどのように指導をしていけばよいのか、学校現場は困っています。そんな思いを受けて、個性化教育の立場から分厚くなった教科書をどのように活用していくのかを、本大会ではテーマに据えました。

日本個性化教育学会第4回全国大会 分厚くなった教科書をどう活用するか～個性化教育の立場から～

1 期日 平成23年8月20日（土）21日（日）

2 場所 上智大学

3 日程

8/20（土）

9：40～11：00

基調講演「今度こそ『教科書で教える』体制を整えたい」

加藤幸次（日本個性化教育学会会長）

11：10～12：30

講演「分厚くなった教科書は学力を向上させるかー認知心理学の立場から」

奈須正裕（上智大学）

13：30～16：40

○分科会A「分厚くなった教科書を活用した学習パッケージの開発」

コーディネータ：成田幸夫（岐阜聖徳学園大学） 佐野亮子（東京学芸大学）

実践報告：中野友香里・菖蒲彩・光武充雄（武雄市立武雄小学校）

五十子晴美（台東区立東泉小学校）

○分科会B「分厚くなった教科書を活用した合科・関連的な指導の工夫」

コーディネータ：澤田 稔（上智大学） 中澤米子（東京福祉大学）

実践報告：内藤和久（中央市立田富小学校） 齊藤一弥（横浜市教育委員会）

○自由研究発表1 学会員による5件の実践・研究発表と討議

コーディネータ：伏木久始（信州大学） 佐藤真（兵庫教育大学）

8/21（日）

9：20～12：30

○分科会C「分厚くなった教科書を活用した学習パッケージの開発」

コーディネータ：成田幸夫（岐阜聖徳学園大学） 佐野亮子（東京学芸大学）

ワークショップ・ファシリテータ：竹内淑子（東浦町立石浜西小学校）

○分科会D「分厚くなった教科書を活用した合科・関連的な指導の工夫」

コーディネータ：吉村敏之（宮城教育大学） 久野弘幸（愛知教育大学）

実践報告：藤本勇二（武庫川女子大学） 鈴木美佐緒（仙台市立広瀬小学校）

原伊津子・種村修（東浦町立緒川小学校）

○自由研究発表2 学会員による6件の実践・研究発表と討議

コーディネータ：伏木久始（信州大学） 奈須正裕（上智大学）

13：30～16：20

シンポジウム「個性化教育の評価論～学力の保障と個性の伸張」

司会：加藤幸次（日本個性化教育学会会長）

シンポジスト：高浦勝義（明星大学） 猪股亮文（仙台市立茂庭台小学校）

藤巻稔（中央市立田富小学校） 浅沼茂（東京学芸大学）

8/20(土)

基調講演 「今度こそ『教科書で教える』体制を整えたい」

加藤幸次（日本個性化教育学会会長）

3月の東日本大震災を受けて、東北から多くの方が本大会に参加されたことに感謝の意を述べられて、講演は始まった。

教科書の内容が増え、ページ毎に順番に終わらせるためにスピードを上げなくてはならない。しかし、教師側はどのような方策を持っているのだろうか。かつては教科書で教えるということも言われていた。我々が改めて教科書に対して主体的にならなければならないと問題提起をされた。

教科書は使用する義務があり、十分に研究されているものなので、それに代わるものはなかなかできない。しかし、使用する幅については「学校や地域や子どもの実態に応じ」「教科や学習活動の特色に応じ」て「学習の総時数を守る」条件を満たせば、各学校が特色ある教育活動を作ることができると述べた上で、具体的な方策を2つ挙げられた。



一つは、単元に軽重をつけることである。今、学年別でやらなければならない教科は算数と理科、高学年の社会科だけで、それ以外は2年の幅がある。それを踏まえた上で、単元の配列を関連性をつけたい順序でつなげてダイナミックなものにしていけるのではないかと述べられた。

二つ目は、合科的・関連的な指導である。合科は、小学校低学年でやれそうであり、関連的指導は、これまでの本会の歴史をひもといってみても明らかだが、我々の主体性を発揮しうるものである。アメリカでは教科を関連づけて指導する「integrate」することは当たり前である。教科書をどれも開いてみて、どれとどれが関連するかということを調べてみなければならないと具体的に述べられた。

最後に、今日的な課題である学力低下に焦点を当てて話された。日頃授業をしていて、課題作りに非常に時間がかかる。動機付けにいろいろと手立てはあるものの、なかなか十分に時間を取ることができない。話し合いも同様である。そこで、学年を年齢で決めずに集団構成を自由にするというのはどうだろうか。臨時に学習集団を再編し、出入り自由にする、と大胆な提案もされた。

まとめとして、計算ばかりに時間をかけるのではなく、計算の意味を今まで以上にじっくり考えたり、国語も言葉を巧みに使い、文章表現を豊かにすることをやっていくべきではないか、明らかに世界の動きはそちらに動いていっていると締めくくられた。(埼玉・中田)

講演 「分厚くなった教科書は学力を向上させるかー認知心理学の立場から」 奈須正裕（上智大学）

新学習指導要領における学習内容の増加にどう対応すべきかについて、認知心理学の立場から話された。

知識を獲得する（習得）ということとは、短期記憶に入ってきた情報を何とか長期記憶に転送し、いつでも活用出来る状態にすることである。それには、繰り返したり、興味関心を持ったり、意味を持たせたりすることが有効であるが、意味が分かる（理解）とは、短期記憶に入ってきた新たな情報を、長期記憶内の知識や経験と照合できたということである。つまり、意味の連関により、知識を関連づけることで知識を習得している。そう考えると「習得」と「活用」の学力は対立するものではない。一定程度の最低の知識がないと思えることは出来ないし、活用するように促すことで知識が確実に獲得される。さらに、自らつかんだ豊かな体験や経験などの日常的な（インフォーマルな）知識は学校で学んだ（フォーマルな）知識より優勢であるため、インフォーマルな知識と関連づけることで、フォーマルな知識はより学びやすくなる。

以上のことにより、子どもたちの既有知識、既有経験をしっかり把握し、子どもたちの声に丁寧に耳を傾けることが必要となる。

また、フォーマルな知識同士を関連させることも有意義である。すなわち、合科的・関連的な指導も有効となってくる。教科内容においては、教科書のどの情報を活用し、何を教えるのかをはっきりさせるという教科内容研究が重要となる。

さらに、何を学ぶのかを事前にきちんと伝えることによって、学びの構えや見通しを持って学ぶことができる。学習への「契約」概念のさらなる導入など、さらに学習形態を工夫する必要がある。

(東京・大野)

分科会A「分厚くなった教科書を活用した学習パッケージの開発」

コーディネータ：成田幸夫（岐阜聖徳学園大学） 佐野亮子（東京学芸大学）

実践報告：中野友香里・苺蒲彩・光武充雄（武雄市立武雄小学校）

五十子晴美（台東区立東泉小学校）

実践報告1 （佐賀県）武雄市立武雄小学校 中野友香里・苺蒲彩・光武充雄
学ぶ意欲を育てる学習パッケージ～「週間プログラム」と「それぞれスタディ」の実践を通して～

自由進度個別学習が、子どもたちの意欲を喚起する構造を持つことから、「いかに教えるか」ではなく、「いかに学ばせるか」の視点で「週間プログラム」と「それぞれスタディ」の学習を導入した実践事例が報告された。

実践報告2 （東京都）台東区立東泉小学校 五十子晴美
マイプラン学習（2教科同時進行個別学習）を通して見る子供の学び

ー教科学習の中で活用型学力を育てるー

「活用型学力（思考力・判断力・表現力）を育てる」「自己学習力を育てる」「全員の学力の保証（複数コース・体験を入れる・豊富な材料・人学び）」の3つの視点を踏まえ、マイプラン学習に取り組んだ実践事例が報告された。

コーディネーター：成田幸夫（岐阜聖徳学園大学）

一人学びのパッケージを作ることにについては、以下の5つの視点についてをお話いただいた。

- ①個性重視で学力と学習力を育成
- ②調和のとれたユニークな教育課程
- ③郷土を愛する創造性豊かな人間を育成
- ④変化と感動のある学校生活
- ⑤新しい型のハイクオリティ教育

(九州・川原)

分科会B「分厚くなった教科書を活用した合科・関連的な指導の工夫」

コーディネータ：澤田 稔（上智大学） 中澤米子（東京福祉大学）

実践報告：内藤和久（中央市立田富小学校） 斉藤一弥（横浜市教育委員会）

はじめに、内藤和久先生より4年生の社会「水害をのりこえてきた人々」を根っこ教材とし、算数・理科・総合を合科・関連させ6年生まで3年間継続した単元「川と大地」の実践報告があった。次に、斉藤一弥先生から「教科書の分厚さの価値」そして「分厚さの理由を積極的に利用する」ことについて算数を通して詳しく説明があった。

その後、発表者が相手の発表内容についてそれぞれコメントした。斉藤先生から内藤先生に対して、教科書の単元と子どもの学習との差にどう折り合いを付けるか、合科するときは各教科の指導要領の改訂の趣旨をきっちり反映する必要があるなどの言葉をいただいた。内藤先生からのコメントでは、学びたいという子どもに寄り添うという言葉が心に残った。

フロアからは、7人の先生方から質問や意見が出された。討議していくうちに、午前中の奈須先生の講演にあった「インフォーマルな知識と関連づけてフォーマルな知識を学ぶ」ということに議論が及んだ。また、教科目標をそのままやっていたのでは、合科・関連は立ちゆかないという意見も出された。どんな子どもを育てるのか。子どもにどんな力を付けるのかを考え、これが実現できる授業にすることが大切である、という話も出された。

B分科会に参加して、教科書の分厚さの価値を明確に認識することができた。このことから教師は、まずは教科がもつねらいを実現するために、指導力量を高めていかなければならないと痛感した。そして、目の前の子どもの実態を踏まえて、教科書をカスタマイズしていくことが必要であることを学んだ。

(四国・谷本)

8/21(日) 分科会C「分厚くなった教科書を活用した学習パッケージの開発」

コーディネータ：成田幸夫（岐阜聖徳学園大学） 佐野亮子（東京学芸大学）

ワークショップ・ファシリテータ：竹内淑子（東浦町立石浜西小学校）

佐野先生、竹内先生、成田先生に指導を受けながら学習パッケージづくりに挑戦した。長年にわたる実践をお持ちの愛知県石浜西小の資料などが並ぶ中、参考にしながら進めることができた。佐野先生に作成上の注意とチェック項目などの説明を受けたあと、3～4人に分かれ、早速パッケージ開発に取り組んだ。それぞれ課題意識を持ち、事前にハガキにて連絡を受け持参した学習指導要領とその解説、教科書とその指導書を元に取り組んだ。前日に教科・領域・学校種・学年を付箋紙に書き提出したものを参考にAからGグループの3、4人が協力して作成した。国語・理科・算数などは、小中高の校種でアイデアを出し合い、基礎基本を改めて確認しながらすすめることができた。また、学習環境作りに最適な着色発砲スチロールボードを電熱線で切りながら気分転換を図りながら進めていった。最後には、全員が作成したパッケージをプロジェクター上で映し出しながら紹介し合う活動ができた。それぞれのパッケージに3人の先生方が指導助言を加えていただくことで、実践のポイントやヒントを全員で確認することができた。

分科会の最後に、成田先生の講話があった。子どもが主役であり主体的に学ぶためにも、管理職も一緒になって保護者の理解を得ながら進めることが成功の秘訣であることを教えていただいた。ここに参加した先生方が多くの実践に取り組んで広げていけるように願いを込めて熱く語っていただいた。サブライブとして、成田先生の誕生日祝いのケーキなども用意され、最後まで厳しさの中にも愛情あふれる楽しい分科会となった。

事務局のご厚意によって会の終了後には、全員分のアイデアが印刷されたものをお土産として持ち帰ることができた。

(九州・片瀾)

分科会D「分厚くなった教科書を活用した合科・関連的な指導の工夫」

コーディネータ：吉村敏之（宮城教育大学） 久野弘幸（愛知教育大学）

実践報告：藤本勇二（武庫川女子大学） 鈴木美佐緒（仙台市立広瀬小学校）

原伊津子・種村修一（東浦町立緒川小学校）

まず、宮城県仙台市立広瀬小学校の鈴木美佐緒先生から、幼小連携を主題とした生活科と他教科との関連的指導の実際として、子ども同士のつなぎ、保護者同士のつなぎ、カリキュラムのつなぎの工夫を通して保護者を巻き込んだの幼小双方向による望ましい交流活動の報告をいただいた。

次に愛知県東浦町立緒川小学校の原伊津子先生、種村修一先生からは、社会科を核に総合的な学習や他教科を関連させた「お米を育てて植物の命を学ぼう」の事例が報告され、稲の成長を通しての水の管理、農家の人々の苦労、米ができる喜びを味わわせる様子がうかがえた。武庫川女子大学の藤本勇二

